

# 本論

## ・内と外

### A. 動詞時制の研究

英語の動詞および助動詞の時制的な屈折は、時とは無関係に起こると考えたほうがよい。結論からいえば、現在形は発話者や書き手のBODYの外にある環境の世界の事象を表現し、過去形は発話者や書き手のMINDの中の思考の世界の事象を表現するものである。この結論に達するには、それほどの書を読まずとも可能であった。現在、英語を学び、また、教える際に生まれる小さな疑問に正面から帰納的に考察することが拙者をこの論に至らしめた。論を進めるうちに、偶然、拙論とほぼ同様の疑問をもち、そっくりの事例を挙げて発表された師の論を読むことになったのではあるが、本論の発想はオリジナルな帰納的思考過程によるものであることを付記しておく。時を越え先人の論を知らずに同様の論を結ぶ者が出たということも本論を支持する論拠になるかとも考えるが、先人ともども同様の誤認であろうとの口にも戸は閉てられまい。先人とは細江逸記博士のことであるが、蓋し、戦前、細江博士が、山田孝夫(やまだよしお)博士の『日本文法論』のP.413-442『文法上の時の論』にヒントを得て発表した『動詞時制の研究』と『動詞叙法の研究』とで論じていたことは大方間違いではない。ただ、彼が舌足らずであったため、それを完全に理解できる人がいなかった。現代の英語学でも、英語は現在形と過去形との2時制である・・・とするのが通説となりつつある。つまり未来形の助動詞willやshallは形態的に現在形であるから、未来形は認められない。また、現在形は必ずしも現在だけを表さないし、過去形も必ずしも過去だけを表さない。すなわち現在形には「未来」や「普遍の真理」、「劇的現在」などの用法が知られ、過去形に「仮定法」の用法の時、過去も過去完了も同じとする)が知られているからである。第一、ゲルマン語の本質として英語は本来2時制でないとおかしい(参考:松浪 有編『英語学コース[2]英文法』大修館(1988)104、松浪 有・村田勇三郎・成田圭一)つまり英文法には、実は時とは異なる意味論的文法規則と尺度があって、2次的に時間も表すことができるというだけなのである。その証拠に、例えばホープ語や日本語には時制はなく法に關係する妥当性という言語的分類基準があるのみ(参考:池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館143-4)でも、ちゃんと時を表すことはできる。第一、英語もひとつの言語である以上、時間の経過ぐらい表せないようでは不自由である

では不自由であるから、時の経過を表すことは当たり前だと考えられる。従って、英文法を時の尺度で分けてはいけないのである。本来シンプルな英文法がより複雑化してしまい、僕らは混乱してしまいます。

動詞の屈折形よりも完了相のほうが意味論的には時制の概念に近いものを表現しているが、完了相は時制というよりもむしろアスペクトであると考え、時制という項目は特に必要がない。本論では、完了相(完了形)がひとつの動詞の屈折形ではないことから文法的な時制としては認めない立場を採用する。すなわち、完了相の現在完了は現在形として扱い、過去完了は過去形として扱い、意味的尺度で文法を分けない。さらに完了不定詞も不定形として扱う。なぜなら、時制の一致や仮定法の問題を解く時に、一度その時間的文意から離れ、現在完了は現在形として、過去完了は過去形としてhave(had)のみを見て形態的に処理するほうが混乱がないからである。つまり、意味的尺度を採用すると時制の一致で従属節に現在完了が生起しない現象

**I thought it was right. (それは正しいと思った)**

**I thought it had been right. (それは正しかったと思った)**

**\*I thought it has been right. (それは正しかったと思った)**

や仮定法に現在完了が使われない理由が説明できないからである。また同時に英語の時制は現在形と過去形と不定形の3つに絞られる。ここで不定形を除けば英語の時制は形態的に2時制であるとする立場は守られる。さらに、現在完了は現在形として、過去完了は過去形としてhave(had)のみを見て処理すると、仮定法も仮定法過去と仮定法過去完了とがひとつになり、残るは仮定法現在のみとなる。ところがこの仮定法現在はアメリカ英語に残存するのみで、実は法助動詞shouldの省略ではなくOEにみられた動詞の仮定法屈折の名残であることが知られている。つまり最近、仮定法が消えたと言われるのは、法助動詞の発達によってわざわざ動詞の仮定法屈折を覚えて使用する必然性が薄れたということなのである。イギリス英語にみられる法助動詞shouldは仮定法現在を直説法過去に収束させるものである。すなわち、すべての仮定法は事実上直説法過去に収束し、よってすべての仮定法は過去形のひとつの用法に収束しつつある。

現在形とは、過去形とは何なのか？助動詞のある文とない文とではどこが違うのか。これがこの論文のテーマなのであるが、文法が違って試験の文法問題はちゃんと解ける。さらにこの非常にシンプルな英文法は、文法問題をもっと簡単に解答できるようにするばかりでなく、実際の会話や英文の購読においても、発話や理解を従来よりもずっと容易にすることが可能であると考えている。この理論では直説法から分離された直説法過去と仮定法(すべて過去)とがひとつにまとめられることになる。命令法はおそらく仮定法現在の類形であるから、これも過去形のカテゴリに入り、法は最終的に直説法現在(叙実法)と直説法過去(叙想法)との2法にまとめられ、かつて考察されてきた時制という文法項目は排除される。これにより英文法は従来よりもずっとシンプルになることが実現化するのである。